

## 金朝末期の思想界の動向

——李屏山を中心として——

桂華 淳祥

李屏山は金朝末期の知識人であり、深く仏教に心をよせてその奥義を探究した居士である。屏山についてはその著書である『鳴道集説』を中心として先学によって研究が進められ、彼の思想の中心が儒・仏・道三教融合論であり、それが万松行秀禪師に師事して学んだものであることが明らかにされていて、中国における儒教・仏教・道教の思想交渉史上重要な人物として知られている。さらには彼の撰文等から浄土信仰にも深く心をよせていたこともまた知られている。

ところで李屏山についてはこのような彼個人の思想・宗教の方面でのみ取り扱われていて、ひとりの知識人としての動向についてはほとんど触れられていない。そこで金朝末期の思想界・宗教界の様相をみるひとつの手懸りとして、仏教に深い理解を示しその立場より三教融合論を唱えた思想家李屏山の知識人社会における立場を、同時代の知識人の著書等を参考にしながら、特にその交友関係を中心としてみてみたい。

さて、知識人社会の中での李屏山の交友関係について『金史』卷一二六の李純甫(李屏山の名・屏山は号である)の伝には、

日與禪僧士子游

とみえるだけである。そこでこのような点について『歸潛志』や『中州集』等を探ってみると次のような記事がみえている。

(李屏山) 天資喜士、後進有一善極口稱推、一時名士皆由公顯於世、又與之指肩爾汝忘年齒、相權教育撫摩恩、若親戚、故士大夫歸附號爲當世龍門、嘗自作屏山居士傳末曰、雅喜推借後進、如周嗣明・張毅・李經・王權・雷淵・余先子姓名劉從益・宋九嘉皆以兄呼、(『歸潛志』卷一)

雖新進少年游其門、亦與之爲爾汝交、其不自貴重又如比、

(『中州集』卷四・李屏山伝)

これによれば雷淵・宋九嘉をはじめとする多くの知識人が李屏山の門下を集まり、又李屏山もこれらの人々に対して親戚のように接し、彼等に善い行いがあれば口を極めて称賛した。そこで一時の名士は皆屏山のところより出たというのである。又、このように思いやりをもって親しく接していたことで新進の少年達までがその門下を集まるようになり、それに対しても屏山は年齢の差など考えず親交を深めたのである。そのようなことから周嗣明・張毅・李經等からは兄とよばれ、また士大夫の間では現在の登龍門であると称されて尊敬されていたのである。このような李屏山の立場は『歸潛志』にみえる他の知識人達の記事に多く「從屏山游」とあることからもうかがうことができる。さらにこの他にも『歸潛志』の中で個々の知識人を説明する時に頻繁に李屏山が引き合いに出され、例えば

與李屏山・王從之同年第(『歸潛志』卷五 馮璧伝)

というように同年の進士であるとか、或いは

文章氣勢、一時流輩推之、屏山最愛之、(『歸潛志』卷二 周嗣明伝)

とみえるように李屏山がその文章を最も愛したという形で紹介さ

れている。このようなことから李屏山の影響が大きかったことや彼が当時の知識人社会の中で中心的存在であったことがわかる。また

屏山之歿、雷希顔誌其墓、趙閑閑表焉、(略) 屏山之歿、諸公祭文挽詩數十篇、(『歸潛志』卷十)

とみえるように、李屏山の死後雷淵と趙秉文によって墓誌銘がつけられ、諸公からの祭文挽詩が数多くあったということからも、生前の屏山が知識人の間で強い影響力をもっていたことがわかる。さらに

余先君(劉從益)嘗爲言、如屏山之才國家能獎養挈提、使讓論天下事、其知識蓋人不可及、惟其早年暫欲有爲有言己、遭摧折所以中年縱酒無功名心、是可爲國家惜、嗚呼、(『歸潛志』卷一二)

とみえるように、劉從益が李屏山の才能を称賛して、屏山に天下の時事を議論させたならその知識は他の人の及ぶところではないのに中年で功名の心がなくなつたことは国家にとって惜しいことだと述べている。このことから李屏山が思想家として以外にもすぐれた才智をもっていた人物であり、他の知識人達に高く評価されていたことが知られるのである。

以上、簡単ではあるが知識人社会の中における李屏山の立場をみてきたが、それによると現在『鳴道集説』の著者として名を知られている李屏山は、金朝末期の知識人の間で多くの交友関係をもち、それらに影響力をもつた人物であることがわかる。そしてこのような李屏山が先に述べたように仏教を深く学び、浄土信仰にも深い感心をもち、それをよく理解していたことから、その影響が少なからず屏山の周囲にいた知識人達にも及んでいたといっ

ても過言ではなからう。その様子の一端をしめすものとして次のような記事がみえている。

(李屏山) 興定間再入翰林、時趙閑閑爲翰林、余先子爲御史、李欽止欽叔・劉光甫俱在朝、每相見輒談儒仏異同、相與折難久之、屏山因以禪語解中庸、(『歸潛志』卷九)

この記事より、当時の知識人社会においてかなり活発に儒教や仏教についての論議がなされており、その中心が李屏山であったことがわかる。また、その影響の端的なあらわれとは断言し難いが、李屏山と交流のあった人物の中には

劉祖謙、字光甫、解州人、(略) 公博學兼通仏老百家言、從趙閑閑・李屏山諸公游甚、(『歸潛志』卷四)

とみえるように仏老をはじめとする諸子百家の説に通じていた、つまり李屏山と同様の学問系統であるものや

僧德普、(略) 嘗著彌陀偈談理性、屏山亦喜、(『歸潛志』卷六)

とみえるように彌陀偈を著わしたり理性の学を談じたりという、これも李屏山と同様の学問や著作の活動をしているものがみうけられる。

このようにみえてくると、李屏山の周囲には彼の思想・宗教面での影響を受けたか、或いはそうでないにしても同様の学問・思想・宗教等によって交流がもたれていた人物がかなりいたと考えられる。従つて李屏山を中心とした知識人社会の動向をさらに深く探ることによって、金朝治下の思想・宗教界の様相をより明確にすることができよう。